

朝倉治彦編

及
禮物
語

古典文庫

朝倉治彦編

禮物語

古典文庫

古典文庫第二七四冊

昭和四十五年四月二十日印刷発行

非売品

語 物 礼 順

編 者 朝 倉 治 彦

発 行 者 吉 田 幸 一

印刷者 東京都板橋区熊野町三四
帝都印刷製本株式会社

発行所

114 東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古 典 文 庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京一四五九七番

目次

口 絵

凡 例 二

順 礼 物 語 上 七

順 礼 物 語 中 八一

順 礼 物 語 下 一六七

解 説

一、順 礼 物 語 二三五

二、北条五代記	二四五
三、見聞軍抄	二六六
四、そぞろ物語	二七六
五、猩々舞・鳥獸憐集	二七八
六、慶長見聞集	二八〇

凡 例

一、本書は、未翻刻の三浦浄心作『順礼物語』を校訂翻刻し、既刊未刊を問はず浄心の他の作を考へんとしたものである。

一、本書の底本には、国立国会図書館蔵旧上野図書館本を使用した。

一、翻刻には、できるだけ原本の面目を保つべくつとめたが、その方針は概ね次の如くである。

イ、文字は通行文字に改めた。

ロ、誤字、脱字、仮名遣ひの誤りなどは、全て原本通りとした。(マヽ)或は(ゝカ)と傍註した。但し、印刷技術上その不可能の場合は、止むなく註を附さなかつた。

ハ、原本に施されてある振仮名は、読み誤りのおそれあるものの外は、省いた。

ニ、和歌、俳句は、別行一字下げに統一した。

ホ、私に改行を多く作った。

ヘ、丁移りは」を以て示し、丁数表裏を註した。

一、卷末に、浄心の作品についての解説を行った。

一、閲覧につき便宜を賜った、図書館、文庫に鳴謝する。

昭和四十四年三月

朝 倉 治 彦

順
礼
物
語

或日のつれ／＼。老人五六人集り。世上の事共語る所に。玄齋と云者いひけるハ。わが友。三五庵。木算入道ぼくさんが。見聞みきこし事を。ほどのうらに。書をきたる草紙。五十二冊あり。是を二つに分て。卅二冊を一部とし。見聞集けんもんしゅうと号す。廿冊を一部とし。是をば。そゞろ物語と名付たり。され共人に見せず。

其子細を問ば。われ見聞し善惡を。ありのまゝしるす。其内に。やんごとなき人のうハさあり。其外笑ひぐさ。「一オ身のうへ迄も記し。たゞをのが。氣味をなぐさむといふ。

此者碁ご数奇ずきにて。板に目をもり付。足もなきばんと。石を持たり。碁に打かゝりてハ。他念を忘れ。食をも忘れ。日の暮。夜の明るをも知らず。

彼者^{かのもの}友達二人有てたばかり。一人碁打間に。一人ハ此文^{ふみ}を見るに。小田原北条家。五代の弓箭^{ゆみや}の沙汰あり。是をひろひ出し。拾冊にあつめ。題号を。北条五代記と付る。扱又いにしへ。今の御時代^{ごじだい}迄の。合戦を記す。是を「二ウ拔出し八冊に写し。是を。見聞軍抄^{けんもんぐんしう}と号す。是をも。木算いまだ知らず。彼入道。われとたがひせん也。はかりことをめぐらし。をのくに此文を見すべし。皆々硯紙を懷中し。わがこのミ／＼の事を写し取て。後わらはん。われハ先に行碁^{ゆき}を打べし。各々ハ跡より来るべしと。木算が宿へ行。碁を打所に。皆々つれ立。翁が草庵へ入て見るに。柴がき。竹のあミ戸。物佗^{わび}しき住居。筆硯^{ひつけん}のあたりに。件^{くだん}の草^{さう}」ニオ紙をつかねをき。玄斎とかたはらに有て。碁を打。各々云。玄斎ハ是に有て。碁を打給へるか。見物せ

んと集る。玄齋云。碁見物叶ふべからず。皆々ハそれなる。双碁のあ
たりにて遊び給へ。碁ハやがてをゆる也といふ。

皆々退き。彼双紙を披見するに。江戸繁昌の事を。專記す。もつばらしる其外色々

様々の事共あり。一人云けるハ。此文に。諸国一見の沙汰多し。われ
若き比。日本国ごくを順礼し。思ひ出ればとて。順礼のさた「ニウ計をひ
ろひ出し。三冊に集め。題号を。順礼物語と付たり。又一人云。く此内
に。酒をあひする人多し。われ上戸成とて。酒の沙汰をえらび出し。

一冊にあつめ。猩々舞と名付。又一人云。此内に。鳥けだ物の哀れ多
し。われハ是がこのミ也とひろひ出し。一冊に集め。鳥獸れん憐集と名
付。又一人云。われそゝろ物語を見るに。遊女をあひする人多し。愚
老若き比ハ。色ごのミのおのこと。人に指をさゝれしかども。老て其

道絶果^{たえはて}たり。さ「三オれ共。今此文を見て。いにしへを思ひ出ればとて。遊君のうハさをひろひ出し。一冊にあつめ。則。そゞろ物語と名付たり。

玄斎の碁ハ。いまだをへざるや。日も暮ぬれば皆々帰る。火をともし。碁打果し給へといひすて退散す。右の順礼物語是也。」三ウ

順礼物語。目錄之上

在原寺。ありわらでら一見の事

鎌倉の。名所和哥の事

陸奥。みちのく一見の事

金沢。かねざわ地景の事

京大仏殿。一見の事

唐が原。もろこし一見の事

熱海。湯治の事

「四才

順礼物語 上

○在^{あり}原^{はら}寺^{でら}。一見の事

見しハ昔。愚老西国一見の時分。大和路にかゝり。石上^{いそのかみ}に付ぬ。かた
はらに佗敷草庵^{わびしき}あり。是なん在^{あり}原^{はら}寺^{でら}と云を聞て。

石上。ふりにし跡ハあハれにも。在^{あり}原^{はら}寺^{でら}の。名のミ残れり

と口すさミ。休らふ処に。七十にあまる老僧。さびしき^{てい}身^みにてただひ

とり。庭を詠^{ながめ}てありけるが。古跡^{ふるあと}を尋ね来る旅人^{りよじん}の。一首のながめこ

そやさ」四ウしけれと。いにしへ在^{あり}原^{はら}寺^{でら}。なりひらのいハれを。こと

こまかに語り給ふを聞ば。井筒^{づゝ}のうたひを。よくおぼえて。ふしをあ

(は又ハわカ) (るノ誤刻カ)
らせて。かたりなり。

見れば。わづかなる庭のうちに。ちやうすほどの。塚をつき。其上に薄を一村植置たり。

又かたはらにいさら井あり。老僧申されけるハ。此井のもとに。なりひら。きのありつねの息女。ふうふたかひに。かげを水かゞミ。おもてをなれば袖をかけ。哥よミ給ひぬ。

扱むらすゝき又一村薄ハふる」五才塚の。まことなるかないにしへの。跡なつかしきけしき哉と。くねりぶしに。いそいそ抑より。さめにけり迄うたひ也。

我聞て。なりひらの昔がたりあハれ也。玉葉に。

形計。かたばかりその名残なごりとて在原の。昔の跡を。見るもなつかし

と。ふる言の葉もおもひ出し。今の世迄も。在原寺。わびしく見え候ハ。いかにと問ば。

老僧聞て。一とせ大久保石見守。諸国縄打に国をめぐられしが。此石上寺へ来り。所の名所を尋られしに。愚僧答て。いに「五ウしへ此石上寺に。遍昭侍り給ひけり。小野小町。ものいひ心ミんとて。

岩の上に。たびねをすれば。いとさむし。莓こけの衣をわれにかさなんとよみて送りしに。遍昭の返じに。

世にそむく。苔の衣ハ。たゞひとへ。かさねばうとし。いさふたりねん

と。後撰集に見えたり。世にかくれなき靈寺れいじ。旧跡たりといへ共。今ハかく。あれ果ぬると語りければ。古跡なればとて。此草庵へ。五石ごくの。寺領を付られたり。

是ハ思ひの外。よろ」六才こびの中に思ひけるハ。此あたりの寺々の